

住民のあなたが主役【^{ゆめぶかい}夢舞皆】
～夢とやる気が 幕^あば開くつと そいが夢舞台たい～

九州地方整備局 河川部 河川計画課 ^{たかせ}高瀬 ^{ゆうき}勇樹

1. 取り組みの背景 —実効性あるビジョンへの道筋—

ダム事業者が行う良いダムづくりとは、治水・利水・環境のみでなく、ダム水源地域の地域振興を含めたものであることが一般的となっている。それは、ダム事業者は地域振興も後押しすべきであるとする、世論の高まりを受けたものであり、現在では、地域振興策を地域等と共同で策定するよう、平成13年4月から「ダム水源地域ビジョン」（以下、ビジョン）として制度化されている。

今回紹介する事例は、「地域振興のための地域の行動計画」に位置づけられるビジョンに、地域活性化の視点から『確実な実効性』を持たせることを目的とした、地域振興の基礎となる「受け皿づくり」の取り組みである。

具体的には、地域の民間事業者に活性化の牽引を担ってもらうため、①意思決定権と実行力を兼ね備えた人材を集めて議論・実践の場を用意していること、②現実に動いている、もしくは動きつつある、民間事業が円滑に進むよう柔軟かつ迅速に対応していること、③また、地域へ国の参加や受け込みとしても新しい取り組みである。

また、このビジョンは、管理中のダムでほぼ策定済みとなっており、ダム湖面やダム湖周辺整備の利活用など、ダム本体完成後のダム本体やその周辺を活かした地域振興策を、ビジョンとして地元自治体や地域と共同で策定しているものが多い。

しかし、嘉瀬川ダムのような建設中のダムでは、湖面利用や周辺整備の利活用といった地域振興策は、ダム完成後に議論することとなるため、建設中のダムにおける『地域振興策＝ビジョン』策定手法としても、新しい取り組みとして紹介する。

2. 嘉瀬川ダムの立地とポテンシャル

嘉瀬川ダムは、佐賀市の山間部、富士町（平成17年10月より佐賀市と合併）に建設中（平成24年3月完成予定）である。その立地は、南に佐賀市、北には人口約150万人を抱える福岡市となっている。これら、都市部の人達や家族連れにとって、この地域は水や緑や、自然の食などを楽しむ場として、大変重要な地域となっている。

次に、アクセス面では、周辺の国道や県道を利用すると、嘉瀬川ダムやその周辺まで、車で1時間～2時間圏内でアクセス可能な場所でもある。

このように、恵まれた立地に嘉瀬川ダムは完成することとなるため、地理的には、ダム周辺地域の地域振興のポテンシャルは高いものと考えられる。

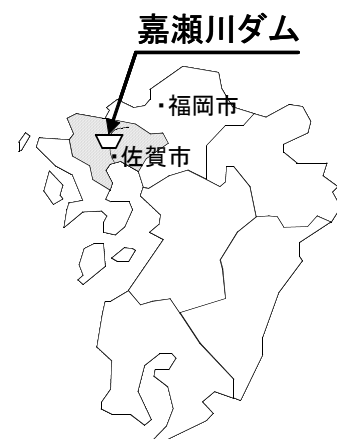


図-1 嘉瀬川ダムの位置

3. 地域振興の後押しのための嘉瀬川ダムにおけるこれまでの取り組みと反省点

管理ダムではほぼビジョンが策定済みであることを紹介したが、嘉瀬川ダムにおいても、これまで将来のビジョン策定を見据えながら、組織の長や地域の有力者を交えた懇談会を設立し、地域活性化を議論してきた。しかし、横とのつながり、地産地消、地域の良さの再発見、都市との交流、人材の掘り起こしといったキーワードの提起に終わり、なかなか実現・実行には踏み込んでいなかった。ここでの反省点は、メンバー選定の段階で直接会ったりなど時間をかけず、肩書きでメンバーを決めていたことや、キーワードとして、地域の進むべき方向性は示されたものの、実行力が欠けていたことである。

4. 反省点を活かした今回の取り組みのポイント

まず、今回も地域振興を議論・実践するためには、その主役となる人々が集い、議論を交わす場は必要と考えた。また、今回は長い時間をかけてまちづくりのあり方を論じることは避け、とにかく、新しい発想と実行で、地域に「成功体験の実感」を残すことこそ重要と考えた。

よって、今回は前回までの反省点から、「議論の場」の設置にあたり、メンバー選定作業にすぐに移らず、平成18年度に、富士町の地域の人たちの中に「地域全体の振興を前向きに考える意識があるか」を把握するための、個別訪問による**FaceToFace**の綿密なヒアリングを実施した。そのヒアリング結果の分析後に、地域の特徴に合致した「議論の場」のコンセプトや会の役割を明確化しており、次の段階でメンバー選定作業を行っている。

5. ヒアリング結果から得られた「議論の場」のコンセプトや役割

ヒアリング対象者は、地域振興を担う事業団体(森林、農、商工、温泉等)や事業を営む個人(農家、食、NPO等)、地元自治会、すべての小中学校、行政部署など、最終的には40を越える個人や団体となった。それにより、次のような地域に潜む現状(振興上の問題点)が浮かび上がっている。

- ・富士町内では、民間事業者も縦割りで動いており、これまで事業者間での横のつながり(協議・交渉、集客のための事業提携等)がなく、お互いが干渉し合わないような風土になっていること。
- ・個々の事業者としては自立的な意識を持った個人や団体が多く、彼らは共通して地域衰退を心配し「縦割りの風土」を変えたい(変える方法が分からない)と思い、ダム事業を一つのチャンスとして期待を寄せていること。

地域振興を議論・実践していくうえでは、こうした“本音”ともいえる地域の現状と課題を解決しない限り、「議論の場」は地域にとって言いやすい要望や期待の整理する場に終始する可能性がある。これらヒアリングの分析結果より、「議論の場」のコンセプトとして、前回の懇談会から出たキーワードとしても一部があがっている、『民間発意による横のつながり』としている。また、役割としては、『新しい発想で議論し、実行までやる』としている。

また、メンバーは一般の住民を対象とせず、地域低迷を直接的に感じている民間事業者を対象とし、事業協力や、事業者(組織)間の連携による新規事業構築といった新たな動き(発想や元氣)を現実的に起こしていくことを見据えて集めることとしており、会のコンセプトや役割に賛同し

た、意思決定権と実行力を兼ね備えた人材とすることとしている。

6. 『夢舞皆』設立の意義と運営の考え方

平成19年2月19日、「議論の場」の正式名称を『ふじのまち夢舞皆』として発足した。その運営方針は、まず、1～2ヶ月に一度のペースで開催し、参画する事業者が自分たちの日常の仕事や抱える課題を発表し合い、「お互いを知ること」から新規事業提携を考えてもらう。次に、『夢舞皆』で提案された“組織間のつながり”により実現できるアイデアについては、個別プロジェクト(=事業化へ向けた動き)として、すぐに関係者を集め、企画やモデル的实践にとりかかる、というものである。特記すべきは、立ち上がる事業の数も新規事業内容も白紙状態の中で走りながら考え、柔軟かつ迅速な対応に心掛け、必ず事業を現実の形にしていこうという、行政としてはめずらしい手法をとっている点であろう。

7. プロジェクトの迅速な事業化(例)

それでは、以下に、『夢舞皆』の設立準備段階から事業者メンバーに相談されるなどして、わずか数ヶ月で成果をあげた事例や、『夢舞皆』での議論から新たに始動しつつある事業者間プロジェクトを紹介する。

1) 温泉と森林をつなぐオプションメニューの開発

第2回『夢舞皆』(平成19年5月25日開催)では、富士大和森林組合がプレゼンテーションを行い(写真-1)、日常の仕事や活動内容を紹介しながら、「営林に加え、新たに森林案内や木工体験や環境教育を手掛け始めた当組合と、何か良い形で協力・支援・提携できることはないか」と呼びかけた。その呼びかけに反応した旅館事業者からは、「旅行会社より、古湯温泉に2泊させる場合の滞在型メニューとなるオプションはないか」との問い合わせが増えていることが報告され、森林組合から「“森林体験”と“自然の食”と“温泉”とをセットでPRしてはどうか」との提案がなされた。



写真-1 森林組合によるプレゼンの様子

これを受け、『森林体験&温泉(入浴+おもてなし)の日帰りメニュー開発』の可能性を議論する会合を別途開催することがその場で決定され、目下調整ワークが進められている。

これは事業者間の情報提供と、相互の気づきで現実にプロジェクト化していくこと。その主体性の意義と、そこに秘められた“新しいつながり”の価値が大きいのである。

2) 『ふじの名水のストーリー』の作成

もう一つ、夢舞皆の大きなプロジェクトとして進めているのは、富士町のイメージ化プロジェクトである。富士町の温泉や観光スポットを紹介するマップは多くあるものの、富士町のコンセプトをマップとしてまとめたものはなかった。よって、富士町のコンセプトとして『水』のストーリーをマップとする試みを実施している。現在は目下情報収集中である。



図-2 名水のコンセプトイメージ図(案)

対外的に広報するためのコンセプト戦略(ツール)として使っていくことを企画している。このワークにより、富士町が“何を価値として存続していくか”の発信機会になれば良いと考えている。

3) 古湯温泉街の案内サインワーク

平成18年12月、『夢舞皆』の設立準備中に「県内外から来たお客さんにも分かりやすく、古湯温泉への案内・誘導サインを設置したいが、ワークの進め方が分からない」と、古湯温泉女将会から相談が持ちかけられた。

これは通常ならば、自治体がお手伝いする仕事であるが、その後に立ち上がる『夢舞皆』のリーディング・プロジェクトになると即断・即決し、バックアップすることとした。



写真-2 女将会サインワーク勉強会の様子

このプロジェクトで評価すべき点は、ワークを開始した4ヶ月後には、多様な関係者間で、早くも以下に示すような多角的展開をみせたことだろう。

- ①看板の材は富士町の間伐材を利用することとしたことで、これまで同事業を一緒に進めることのない温泉旅館組合と森林組合が協議に入ったこと。
- ②表示内容やデザインの統一性、設置場所、看板作成コスト等について、女将会から始まったワークが、温泉旅館組合の総意となり、自治会を巻き込んだまちづくりワークまで広がり、現在では、地元自治体である佐賀市の進めている「街並み環境整備計画策定委員会」へバトンタッチされようとしており、目下調整中であること。

8. まとめ —ビジョンの前に、振興に向けた小さな動きをつくる意義—

今回の『夢舞皆』で実施した、事業者同士を現実につなげる取り組みは、これまで横のつながりが少なかった地元民間事業者にとって、「富士町内の気運が高まっている」との実感につながっているようである。また、前述の各ワークや“つながり”による新規事業の実現は、これからの事業者同士の提携の手応えとなり、それによる人々の気持ちの活性化につながっているようである。

今回は、夢舞皆を設立するまでのプロセスで、国が地元深く入り込み、多くの個人や団体に、「FaceToFace」で、ヒアリングを行っている。また、会の設立では、コンセプトや役割を、明確にして走り出している。これらにより、特に夢舞皆メンバーに、「地域振興の主人公は誰か」、をハッキリさせる意識付けを行うことができたと考えている。つまりそれが、地域振興に持続性を持たせることにつながると確信している。

今回紹介した事例は、地域振興の基礎固めの後押しを行う取り組みである。土台を固め、倒れにくい計画を立てていくこと。これが真に持続的に、地域振興を図ることができる行動計画、「ダム水源地域ビジョン」の策定手順だと考えている。

『夢舞皆』は、数年後にはその形はなくなっているかも知れない。だが、「お互いを知ることによる事業者間の提携」や「民間発意こそが地域活性化」という経験が地元の事業者に根付いていれば、事業メニューも追加・改善していき、持続的な地域振興が図られることになるだろう。

地域振興の基礎固めから支援し、ビジョン策定時には、持続的な地域活性化の動きが担保できているような今回の取り組みが、ダム水源地域振興の先進的なプロセス手法となっていくことを期待したい。